



なり、今も遭ち人といふ火刑の煙ゆる燄に向つて、彼れたるブル
 ーノー、[◎]崇高ともたつたのであら。また爽風たる英氣、嶄々たる
 氣象も婦人の於ては適當の場合と之を用ひしは善とあり徳と
 あり、決して悪弊でないなり。右来我邦の婦人高尙模範的なる婦人
 平常に柔知であつて、毫も我かなく、男勝の氣象も無いやうで
 あるが、一旦人生の大事大節に際しては、非常なる我か出来、^{に敵}寛
 量し權勢も困苦も死も其志を奪ふことが出来、^{に敵}たゞとして節
 操を守り、剛強よく有勢男子をして慙愧と堪へざらしむる底の
 ことがある。斯の如く、我と傲岸の氣質、之を用ひし如何によ
 りて善とし、悪としたり、之が絶對的價値、人間の尊重すべき所

有である。藤尾は此尊重すべき絶對的價値を高程度に有して
 居る。故に吾人の「美南」といふ女だと感ず。宗近は「文」向に「外
 交官の女房」にや、あ、云ふんでふいと不可なりと云ふ、藤尾
 が此價値を認めただからである。吾人の何となく淡く納言を志
 出さしむるを得ふ。此點もまた藤尾の悲劇が吾人に與ふる印象
 と關係を有するものであら、注意を以てせよ。

藤尾の性格、作者が飛動の筆、濃厚の色を以て描寫せしめて
 あつて、其印象も然て吾人讀者に鮮明である。之を要するに、藤
 尾の極て我自我心の強き、負けず嫌ひなく誰とも居ることを知
 らふに、自説の固執する、人を眼下に見卸す、又せし、他の男子でん、

9

如何なる嘲罵をも加へ如何なる侮蔑の言葉舉動をも爲し、傲
 然と憚らぬものでもよい。又た執念深し、揚足を取つて巧み人を
 困却らし、我を満足して凱歌を奏ぐると好み時々の詩的趣味を自
 慢する女でもある。此等、實に藤尾が**熟練**であり、其消極的要素
 があり、其悲劇の主要なる原因である。之と同時に藤尾の堂々
 たる積極的三要素を有して居る。即ち「愛南更らぬ女」と吾人
 が言ふ言ふしむべき彼の性格の一部の非凡前上述べた。彼女
 が我の絶対的價值及び其自分と美とを傲る。一方その憎む女
 とのふ其缺點、他方より更らぬ女富裕なる自分、容色**容態**、技辭。
 是等、暗々裏々吾人讀者が藤尾を執り抱く印象觀念である。

予は此等の要素が藤尾が悲劇的滅亡に對する吾人が感情を如何
 にする。影響を如何に有するかに、後文に論じんと思ふ。

藤尾が母の描写も彩色頗る明瞭である。彼女の藤尾より遙
 かにやうな女である。作者が巧妙に言へる如く、針を海綿に藏し
 て、ぐつと握らしめ、柔き手に膏を貼つて刺口に快よく慰めよ、
 出来得べくんば唇と血の局所に接け、他意なきを示す、衣の人
 物である。母が欽吾を藤尾小野結婚の件を相談する會話、如
 きに此形容が、そのことよく的中して居る。母は明白に六九言
 まで、其の藤尾との對話、宗近の父に語り、所より察するに疑
 もなく、欽吾を進出して、甲野の家財産と其女子の藤尾をやりた